
郷愁デート

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

郷愁デート

【Nコード】

N3811I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

合コンで知り合った広樹という男の無骨な態度に惹かれる私、沙紀。広樹は純で朴訥な青年だった。デートに誘われる私だが、そこは意外にも街中の公園だった。だが、そこで故郷への想いを語り、明日への希望を見出そうとする。

私が東急線の蒲田駅に着いた時、広樹はもう、そこにいた。

「おはよう。ごめんね、遅れて。待った？」

私は精一杯の笑顔を浮かべ、手を振りながら広樹の元へ駆け寄った。広樹も私にすぐ気付き、屈託のない笑顔を返してくれる。

「ぜんぜん。だって約束の時間より、十分も早いじゃないか」

そう言っただけで、広樹の笑顔が爽やかだった。

「それに俺、待つのが結構好きなんだ。何かこう、ワクワク、ドキドキしてさ」

「ふふっ、面白い人。でも何となくわかるかも。その気持ち」

私は笑いながら同調した。私も人を待たすくらいなら、自分が待たされる方が好きなタイプだ。

「ところで、沙紀ちゃん。ちゃんと、おめかしはしてこなかったようだね」

「だって、汚れてもいい格好で来いって言ったのは広樹でしょ？」

「うん、そうだよ」

見れば広樹はジーパンにTシャツだ。私もそう、ジーパンにTシャツを羽織っている。別に示し合わせたわけではない。こんなところまで、フィーリングが合うものかと、自分でも少し照れてしまう。

「ねえ、今日はどこへ行くの？」

「最高のアトラクションだよ」

その言葉に、私は胸をワクワクさせながら、広樹の腕に自分の腕を絡めた。

平日には多くのサラリーマンやOLでにぎわう階段も、今日は静かだ。その階段を二人で降りる。

階下では、暖かい陽だまりが微笑んでいた。まるで、私たちを優しく見つめ、包み込むような太陽の光。

そんな陽だまりに祝福されながら、私たちは歩いた。

松原広樹とは、いわゆる合コンで知り合った。

私の会社のOL三人と、見知らぬ男性が三人。合コンは蒲田のイタリアンレストランで行われた。私たちの職場が蒲田にあるということへの配慮もあったのだろう。

二人の男はブランド物のスーツでバツチリと身を固め、いかにもエリート風の「おぼっちゃま」だった。

それに対して、広樹は何と作業服で現れたのだ。しかも彼は、それを「俺の正装だ」と言い張って譲らなかった。

「俺さあ、BMWとベンツ持ってるんだよね。沙紀ちゃん、今度、ドライブどう？」

背の高いブランド男が私にブランド物の腕時計を見せつけながら語りかけてきた。

「軽じゃダメなの？」

私はぶっきらぼうにそう返した記憶がある。

「そんな、僕に軽なんて言葉はないのさ。あんなのラジコンみたいなもんだよ」

「私、ラジコンに乗ってるんだけど」

「ああ、ごめん、ごめん」

ブランド男が肩透かしをして、おどけてみせる。

「でも、いいんだよ。君には美貌があるから」

「キヤーツ！」

周囲の同僚が一斉に湧いた。

合コンは実に不愉快な時間だった。「おぼっちゃま」のブランド男たちは女性の喜びそうな台詞を不自然に並び立てた。一見、紳士に見えるその下に、飢えた野獣の影が見え隠れしていた。

それでも同僚の二人は、何とかブランド男たちに話題を合わせていた。

「君の好きな食べ物は何だい？」

「ラーメン」

ブランド物の腕時計をした男が、私にしきりに話しかけてきた。質問はごくありきたりで、実に味気ないものだったことを覚えている。中身のない話では、いくらブランド物のスーツで身を固めていても、すべてがまがい物に見えてしまう。私はその男の話を、のりくらしりと躲していた。それも、相手の意にわざと反する答えを見つけて。

そんな私の態度に腹が立ったのだろう。その男は突然、広樹を攻撃し始めたのである。

「誰だよ、こんなチンケな奴を呼んだのは。こいつ理工学部を出てんに、冴えない町工場を継いでるんだぜ。信じられねー」

飢えた野獣は獲物が手に入らないとわかると、ところ構わず攻撃を仕掛ける代償行動に出たのだ。いや、もともと自分の金持ち振りを際立たせるために、わざと広樹を誘ったのかもしれない。

しかし、広樹は顔色ひとつ変えずに、食事をしていた。

「お前つて、卑しいよな。こんな時でもガツガツ食いやがつて」
その男は更に広樹を責めた。

しかし、広樹はその男を一瞥すると、言い放った。

「男は食う時には食うもんだ。お前ら、余計なことをしゃべり過ぎなんだよ。虫酸が走るぜ」

私はこの時、既に広樹に対して魅力を感じていたのかもしれない。

「こいつ、空気読めねえよー」

ブランド男が二人揃って同じ台詞を吐いた。

「空気を読めないのはどっちかな？」

広樹はしたり顔で、二人を眺めた。

私の心が男に向いていないことくらい、広樹にはお見通しなのだろう。

その後の二次会には、広樹はもちろん行かなかった。

「待って！」

私は広樹の背中を追った。作業服を纏った背中が凜々しく見えたものである。

「おい、沙紀ちゃん！ 二次会、行こうよ！」

背中ブランド男の声が聞こえた気がした。しかし、私の瞳の中には、広樹の背中しか映っていないかった。

「あいつらのところへ行きたかったら、俺に遠慮することないんだぜ」

広樹が振り向き様に言った。

「違うの。私の意志で来たの。あなたに興味があるのよ」

すると先程までムスツとしていた広樹の表情が、少し和らいだ。

「えーと……、名前、何だっけ？」

「井上沙紀よ。覚えといて」

「これから、自宅兼工場に戻るんだ。そこで君にプレゼントをあげるよ」

広樹はそう言うと、風を切って歩きだした。堂々とした歩き振りだ。風がまるで、彼を避けているようだった。

広樹の自宅兼工場は、蒲田駅から歩いて十五分程のところにあつた。それは小さな町工場だった。

「ここで何を作っているの？」

「ネジさ」

そう言いながら、広樹は古そうな扉を開けた。ムワツと機械油の匂いが私に抱き着いてきた。どこか男の体臭にも似たその匂いは、女の本能を刺激する媚薬が含まれているのだろうか。その時、その匂いが嫌だとは思わなかった。

蛍光灯の明かりを点けると、年代物と思われる機械が並んでいた。「俺はここで、親父とネジを作っているんだ。うちのネジはね、ジャンボジェット機に使われているんだ」

広樹はネジを一本摘まんで、私に見せた。

「このネジ一本が、多くの乗客の命を支えているんだ。俺と親父にしか作れないネジもあるんだぜ。それが俺の誇りでもあり、俺が俺でいられる強みかな」

そう熱く語る広樹の瞳は、まるでマンガの主人公のように輝いて見えた。

「素敵……」

その言葉は自然と出た。特に意識したわけではない。私は広樹の中に、人間が人間らしく生きる素晴らしさを感じていたのだ。だからこそ、ブランド男に罵られても平然としていられたのである。

ブランド男たちが外見は麗美にも関わらず、実は軟弱な耐震偽造のマンションだとしたら、広樹は基礎も柱もしっかりとした、注文建築住宅と言ったところか。よほどのことがない限り、倒壊しない芯の強さを広樹に感じていた。

それに比べてOLの私はどうだ。私が退社しても代わりの人材はいくらでもいる。毎日、パソコンのキーを叩き、書類に印鑑をもらう。私でなければできない仕事というわけではない。私は自分の仕事に誇りが持てる広樹が羨ましかった。

そして、そんな彼に好意を寄せている自分にはつきりと気付いた。広樹の強さが欲しかった。少しでも側にいて、その強さを分けてもらいたかった。そして、同じ時間を共有したかった。

「素敵なんて言ってくれたのは、君が初めてだよ。ちょっと待って」

広樹は照れたように笑うと、機械に向かい、おもむろに動かしかじめた。男らしい、無骨な音が夜の町工場の中に響き渡った。

程なくして、広樹は私の方へ向き直った。その手には鮮やかな銀色に光るネジが握られていた。

「これを君にプレゼントするよ」

「ネジを私に？」

「これはどの規格にもない、世界でたったひとつのネジさ。君のためだけに作ったネジだ」

私は銀色の螺旋を受け取った。その時、それはダイヤモンドより輝き、その光沢はプラチナより贅沢に見えた。そして一本のネジの持つ重量感が、これ程とは思いもしなかった。

ただの小さいネジ。されど人の思いのこもったネジ。物を作るということは、魂を込めるといふことなのかもしれない。何だか、そんな気がした。

「ありがとう。肌身離さず持って、大切にするわ。お守りにしようかしら」

「そう言ってもらえて嬉しいよ」

広樹が屈託のない笑顔を返した。私はその裏表のない笑顔に、また惹かれた。

「今度の日曜日、空いていないかしら？」

「そう誘いかけたのは、私の方からだった。」

「ああ、特に予定はないよ」

広樹がはにかむように笑った。女性に対しては奥手なのだろうか。その照れた顔が可愛らしかった。

「なんだ、夜中に機械、動かして。近所迷惑も考える」

二階からパジャマ姿の男性が下りてきた。顔は広樹に似ている。

「すまん、親父」

「どうやら広樹の父親のようだ。」

「すみません。夜分にお邪魔して」

私は深々と頭を下げた。

「はあ、広樹、えらくベツピンさんを連れ込んできたじゃねえか」

「親父、言葉遣いに気を付けろよ」

「おお、わりい、わりい」

パジャマ姿の広樹の父親は、私の方へ向き直ると深々と頭を下げた。

「私に似て、不器用な息子ですが、ひとつよろしくお願いします」

その姿が少し滑稽ではあったが、いやらしさはなかった。

「いいから、親父は邪魔すんなよ」

広樹が父親の背中を押す。父親は「はいはい」と言いながら、二階へ上がっていった。そのやり取りが、どこにでもありそうな幸せで、可笑しかった。ホッとできる一幕であった。

広樹がバツの悪そうな苦笑を私に向けた。私は微笑みを返した。

その翌日、会社の給湯室では、昨日の合コンの話で盛り上がっていた。私はわざと聞かない振りをした。

「ねえ、神宮司さんって証券会社の社長の息子さんなんだったね。将来、絶対に社長を継ぐと思うわ。ベンツにBMWを三台も持っている話にはびっくりしたわ」

「彼を射止めれば玉の輿よ」

カップを洗う私の背後で、そんな会話が聞こえた。神宮司とは、高級腕時計にブランド物のスーツで身を固め、私に話しかけてきたあの男だろう。広樹を罵った、あの男だ。

「でも、神宮司さんはやっぱり沙紀に興味があるみたいよ。頼まれだから、つい携帯のメアド、教えちゃった」

その声に、思わず私はコップを落としてしまった。洗剤で滑ったこともあるだろう。だが、動揺していたのは確かだった。

私は振り返ると、怒鳴るように叫んだ。

「ちよつと、何てことするのよ!」

「そんな怒らないでよ。いい話じゃない」

「ちつともよくないわ。大きな迷惑よ。私にはね……」

そこまで言いかけた時、私の携帯電話が鳴った。メールの着信音だ。

「きたきた。神宮司さんからよ」

同僚たちは囁し立て、騒いでいる。開いてみると、確かにあのブランド男のようだった。私とゆっくり話がしたいという内容だった。私はすぐさま、そのアドレスを着信拒否に設定し、メールを削除した。

「あーあ、もつたいない……」

同僚たちからため息が漏れた。

「私にはちゃんと彼氏がありますから」

私は突っ慳貪に言い放った。

「えーっ！ 沙紀に彼氏できたのー？ それって、もしかして作業服の彼？」

「その、まさかよ」

私は踵を返すと、自分のデスクへと向かった。背後で同僚たちの、何やらヒソヒソと話す声が聞こえたが、私は振り返らなかった。

デスクのパソコンはスクリーンセーバーの画面になっていた。その日の朝、ダウンロードしたばかりの、お気に入りのスクリーンセーバーだ。

広樹のネジでしっかりと支えられたジャンボジェット機が、パソコンの画面の中で伸び伸びと飛んでいた。

そして今日、私は広樹と初めてのデートをするのである。

「ねえ、最高のアトラクションって何？」

私が甘えるように尋ねると、広樹はクスツと笑って私の顔を見た。「それは行つてのお楽しみさ。多分、気に入ってもらえると思うんだけどね」

私たちは腕を絡ませながら、蒲田駅からJRの線路沿いを川崎方面に向かって歩いた。程なくして、環状八号線の陸橋をくぐる。

「昔はね、今で言うホームレスがこの陸橋の下にいたんだよ。リヤカーに荷物を乗っけてさ」

「へえ、そうだったんだ」

「髪も髭もボサボサだね。いつの間にか、いなくなっちゃったけど、どうしたのかな？」

さりげないその言葉は、ホームレスへの気遣いに溢れていた。私は広樹の心の内面の温かさを知った。おそらく、合コンにいた、あのブランド男たちは、そんな気遣いなど少しもないだろう。

そして思った。この人ならば、私を幸せにしてくれるに違いないと。

それから、引込線の踏み切りを渡り、右手に自動車教習所を見ながら歩く。かなりの距離だったが、不思議なことに広樹と腕を組ん

でいると、まったく苦にならない。

少し古びた団地の向こうに公園が見えた。その公園にはおびただしい数のタイヤが散乱している。捨ててあるのではない。それは明らかに子供たちの遊具だ。

公園の敷地内にはタイヤで作られた大きな怪獣まである。子供たちの歓声が、どこそこから聞こえていた。

「さあ、着いたぞ」

広樹が私の腕を解いた。別に温もりを解こうとしたのではない。

広樹は背伸びをすると、円満の笑みを私に向けた。

「これが『最高のアトラクション』？」

「そうさ」

広樹は自慢げに言う。

ただの古タイヤの山が、その時は無性に輝いて見えたものだ。どこか懐かしさを湛えて、燦然と輝いているではないか。

いや、古タイヤが輝いているのではない。それを使って遊ぶ子供たちの笑顔が輝いているのだ。

久しぶりに童心に返ってみるのも悪くはないと思う。どこか郷愁を誘う公園だった。

私の顔からは「最高のアトラクション」を楽しみに、自然と笑顔がこぼれた。

腕を組み直した私たちは、公園の敷地内へと足を踏み入れた。

「ここは西六郷公園。通称、タイヤ公園って言ってね。ガキの頃から、よく俺が遊んだ公園なんだよ」

「へえ、そうなんだ。楽しそうな公園ね」

横幅の広い滑り台では、子供たちがタイヤに乗って滑って遊んでいる。何とも微笑ましい光景ではないか。

私の脳裏に、やんちゃ坊主だった頃の広樹が、無邪気にタイヤで遊ぶ姿が浮かんだ。

「この公園には俺の思い出がいっぱい詰まっていますね。でも、思い

出っつていうのは振り返るばかりじゃない。どんどん積み重ねていくものなんだ」

広樹はそう言うと、足元にある大きめのタイヤを手で拾った。そして私の手首をグイッと力強く引っ張ったのだ。

「きゃっ！」

「さあ、最高のアトラクションだぞ！」

私は広樹の手に引かれるままに、滑り台の階段を駆け登った。

幅広い滑り台はコンクリートで出来ており、傾斜もそれなりに急だ。どうやら広樹は、私と二人でこの滑り台をタイヤで滑るつもりらしい。

「よし、俺が前に乗るから、しっかり掴まっているよ」

タイヤに広樹が腰を降ろした。私もタイヤに腰を降ろす。不思議と照れはなかった。彼は「思い出は積み重ねるもの」と言った。ならば、今日の「最高のアトラクション」を存分に楽しみ、新たな思い出の１ページを作ろうではないか。

私はバイクの後ろで男性にしがみつく、少し頼りない女性のように、しっかりと広樹のウエストにしがみついた。

広樹が足を漕ぎだすと、少しずつタイヤが前に進む。それはジェットコースターが上り坂を登る時の緊張感に似ていた。

「いくぞ！」

タイヤが一気に滑り出した。私は思い切り、広樹のウエストにしがみついた。

「きゃーっ！」

なるほど、と思う。どんな遊園地のアトラクションでも、二人の身体がこれほどまでに密着するアトラクションなどない。

二人の体温と昂る心臓の鼓動が伝わる。それが嬉しかった。好いた人とここまで密着し、興奮を味わう。確かに最高のアトラクションだ。他人の思い出とは、これほど新鮮なものなのか。

滑り台を下り終わるまでの、ほんの数秒の間、私は至福の時間を過ごすことができた。それは私にとって新たな思い出の１ページで

あり、広樹にとっては書き加えられた思い出の1ページでもある。

滑り終わった後、私の靴の中に砂が入っていた。私は靴を脱いで、砂を落とす。幼い日によくやった仕草だ。

周りを見回すと、大人だけでタイヤの滑り台を楽しんでいるのは、私たちだけのようだ。子供たちは無邪気にはしゃぎながら、タイヤ遊びに夢中だ。そして、それを優しく見守る親たち。いつかは自分も親になって、子供と一緒にこの滑り台を滑りたいと思った。

「さあ、もっと滑ろう」

広樹が私の手を引っ張った。

「うん」

私はもっと広樹の思い出を豊かにしてあげたかった。そして、自分の思い出をもっともっと作りたかった。

何度かタイヤの滑り台で滑った時だった。広樹はタイヤに座ったまま、立ち上がるうとしなかった。私もそんな彼にしがみついたまま、離れずにいた。こんな時は時間も長く、お互いの温もりも、より感じられて嬉しい。ただ、高鳴る心臓の音が、お互いの服を擦り抜けて伝わる。

広樹がタイヤの怪獣を見上げた。

「俺さあ、結構強がって生きてきたけど、正直言って、へこむこともあるんだ」

広樹がボソツと呟いた。

「そんな時には、この公園に来るんだよ。すると、無邪気に遊んでいたガキの頃を思い出して、何か元気になれる気がするんだよな」

私はこの時、広樹の背中の子の大きさを測っていた。広樹のウエストをギュツと抱き締める。

「思い出の引き出しを開けることは、決して悪いことじゃないわ。いつも歯を食いしばってばかりいたら、疲れちゃうもの。思い出に浸るのは、明日への活力剤にもなるんじゃない？」

「そう言ってくれて嬉しいよ」

私が抱き締める手を、広樹が上から強く握ってくれた。男らしい強さと、優しさのこもった力だった。真の職人肌の掌の感触は、私には何とも言えず、心地よかった。

私はこの時、広樹とならば支えあって、上手くやっていけるだと確信した。

二人でタイヤの怪獣を見上げた。その瞳は優しそうにも、怖そうにも見える。怪獣はこの公園に訪れる人々を、時に優しく見守り、時には厳しく叱咤してきたのだろう。怪獣は太陽を背に、誇らしげにそびえ立っていた。

「何か、喉が乾いたね。ジュースでも飲もうか？」

広樹が爽やかな笑顔で振り返った。

ひとしきり滑り台で遊んだ後、私たちは公園の脇に架かる歩道橋の上にあった。JRの上に架かるこの歩道橋からは、行き交う電車が眺められる。

そこで広樹と私は、自動販売機で買ったジュースを飲んだ。広樹はグレープジュース、私はオレンジジュースだ。

「俺さ、幼稚園の時、親のワインをグレープジュースと間違えて飲んじゃったことあってさ。甘くはなかったけど、結構イケた記憶があるんだよね。親も『この子、飲めるじゃん』なんて囁し立てたっけ」

広樹がグレープジュースを見つめながら笑った。

「私も実は、小学生の時くらいかな、お父さんのお酒をこっそり飲んだことあるのよ。結構美味しかったな」

「お互い、似たもの同士ってことか」

「かもね。あははは……」

遊んで汗の滲んだうなじを、そよ風がくすぐった。私の髪が風に靡いた。

「どうだい、決して綺麗な空気とは言えないけど、下町の風も満更じゃないだろう？」

私の顔を覗き込みながら、広樹が笑った。それは自分の故郷であるこの地を自慢しているかのようだ。

「ええ、とつてもいい気持ち」

「よくガキの頃ね、この歩道橋から電車の運転手に手を振ったんだ。手を振り返してくれる運転手と、くれない運転手がいてね」

広樹がそんな話をしていると、ちょうど京浜東北線が川崎方面からやってきた。すかさず二人で手を振ってみる。すると運転手は照れたような笑みを浮かべて、手を振り返してくれた。二人で顔を見合わせ、「やったね」と言いながら笑った。

「ところで沙紀ちゃんは何の生まれかい？」

「ううん。私が生まれたのは神奈川県津久井という所なの。今は相模原市と合併しちゃったけど、昔は津久井町っていう町だったのよ。高校の時のあだ名なんか『ぐんちゃん』だもんね。郡部出身だから『ぐんちゃん』ってわけ」

私はしばらく足を向けていない故郷を思い出した。

私の育った青野原という場所は、今こそ相模原市になったものの、最近では路線バスも廃止されたと聞いている。

「じゃあ、ここと違って緑も豊かなんだろうな」

広樹が遠くの空を眺めながら呟いた。

「森は深いわよ。それに道志川っていう川が流れていてね。キャンプやバーベキューなんかやるには最高よ」

私は故郷に足を向けていない後ろめたさを覚えつつも、自慢げに言った。ちょうど津久井の方角は建物に遮られ、遠方までは望めない。しかしこの時、私の心は遙か彼方の青野原に飛んでいた。

「今度、一緒に行こうよ。今日は俺の思い出に付き合ってくれたから、今度は君の思い出に触れてみたいな」

「行こうよ、行こうよ。キャンプ場もあってね、道志川の川遊び、楽しいんだよ」

私ははしゃぐように言った。童心に返り、広樹と川遊びを存分に楽しんだ後、川原で炭火を起こし、清流で磨かれて身の締まった鮎

を味わう。野趣満点のデートではないか。

そんなことを想像すると、自然と唾が出てきた。しばらく味わってない鮎の塩焼きを、久々に食べたくなった。あの西瓜のようなほのかに甘い独特な鮎の匂いを嗅ぎたくなった。よく父が釣ってきた、思い出の味と匂いだ。

「道志川は鮎もいてね。それが美味しいんだよ」

「そうだろうな。水の綺麗な所の鮎は美味しいだろうな」

広樹が舌なめずりをしながら呟いた。

「そう言えば、そこに流れている多摩川にも最近鮎が戻ってきたんだよ。昔は洗剤の泡で汚れていた多摩川にさ。食べたことがないから味はわからないけど、ここで生まれ育った俺としては、ちよっぴり嬉しいね」

広樹が自慢げに言った。誰でも心の中の故郷は、いつまでも綺麗なものでありたいと願うものだろう。私だってそうだ。汚れた道志川の水など、想像もしたくない。

ふと、公園の方を向いた。タイヤの怪獣の瞳は厳しさの中にも優しさを湛え、二人を見守っているかのようだ。

私が怪獣に見とれていると、広樹がクスツと笑った。

「まだ幼稚園の頃の話んだけどさ。近所の女の子とあの公園に遊びに来てね。あの怪獣の尻尾から背中に乗って、オシッコしたことがあったんだ。『天気予報をお知らせします。今日の東京は雨です』って言うてね。そうしたら、その女の子がカンカンに怒ってさ。俺の親に言い付けやがんの。お陰で俺は、お袋から大目玉食らったんだよ」

「ぶぶつ、あはははーっ、わーはっはっはっ、ひーっ、おかしい、やめて！」

お腹の皮が擦れそうだった。私は横隔膜が痙攣しそうなくらいに笑ってしまった。こんなに心の底から笑ったのはいつ以来だろうか。「そんなにおかしいかい？」

広樹がニヤニヤ笑いながら、私に尋ねる。

「もうダメ。涙が出ちゃう」

笑い過ぎたせいだろうか。遊びの疲れも手伝って、私のお腹がグ
ウィツと鳴った。

「聞こえた？」

「聞こえたよ。そろそろお昼にしようか。餃子が美味しいラーメン
屋があるんだけど……行くかい？」

デートでラーメン屋と、あくまでも気取らないのが広樹らしくて
いい。そうだ、私だって等身大の自分でいたい。自分を偽り、飾っ
たところで長持ちはしない。ならば最初から素のままの自分での
方が楽だ。

「行く、行く。私、餃子って大好きなんだ」

「その餃子の中に青海苔が入っていてね。香ばしいんだよ」

私の口の中は、既に唾で一杯だった。自分の喉がゴクリと鳴った
のが、鼓膜に直接響く。

「私、ラーメン、大盛り食べちゃおうかな」

「よく食べる女の人って、好きだなあ。健康そうだな」

私はまた、広樹に腕を絡ませた。そして、歩道橋の階段を踏みし
めるように下りた。

公園から遠ざかる足を止めずに、後ろを振り返る。逆光に映える
タイヤの怪獣は二人を祝福するかのように、優しく私たちを見つめ
ていた。

(了)

(後書き)

初投稿です。

自分の生まれた土地を舞台にした作品を書いてみました。
よろしくお願ひ致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811i/>

郷愁デート

2010年10月8日15時31分発行